

茶の湯文化学会会報 No.81

第81号 / 2014年7月6日 〒606 京都市左京区下鴨森本町15 TEL. 075-702-9270
発行 茶の湯文化学会 -0805 生産開発科学研究所内 FAX. 075-702-9314
http://www.chanoyu-gakkai.jp e-mail chanoyu@oregano.ocn.ne.jp



緞熙堂にて

茶の湯文化学会平成二十六年大会の見学会は、大会の初日の六月十四日（土曜日）、京都の藪内家燕庵で行われました。

通常は一般非公開であること、今年は流祖剣仲と縁の深い織部の四百年遠忌であること、さらには今回見学会が許されたのは、学会会員限定の先着九十名であったこと、などから参加者の期待はいやが上にも高まっていたといえるでしょう。

集会場所には、早々と多くの方がお見えになり、見学会が始まる前から、地図を見ながら「堀川はどちら？」

「本願寺は？」などど位置を確認されるお声も聞こえました。藪内家は、西本願寺と東本願寺の間、西洞院通正面下ル西側にあります。

予定時間になり、熊倉功夫会長、中村利則副会長の

平成二十六年大会見学会・藪内家 会報編集部

先導により、古儀の格式を感じさせる表門より入れました。

まず通していただいたのは主座敷の緞熙堂です。「緞熙」とは、徳が光り輝き続けるさまをいい、「大学」の「詩経」に云く「穆穆たる（徳が高い）文王、於、緞熙にして敬して止まる」とに由来します。

緞熙堂では、藪内紹由若宗匠からご挨拶をいただき、続いて執事の石黒様より藪内家および藪内流のお茶室やお道具、お点前についてお話を伺いました。

藪内家は、初代藪中齋剣仲紹智（一五三六～一六二七）のころより下長者町新町（現在の府庁あたり）に屋敷を構えていましたが、西本願寺の十三代良如上人より接待役を仰せつけられ、寺領の土地を与えられて寛永十七年（一六四〇）現在地に屋敷を移しました。しかし、元治元年（一八六四）に蛤御門の変で類焼してしまいます。その時から八代、九代、十代紹智が三代かけて屋敷の復興に尽力しました。その中で西本願寺から御見舞として下賜されたのが緞熙堂です。十七代法如上人の居間として使われていた建物で、円山応挙の弟子、吉村孝敬筆の墨竹の襖があります。明治二十年代の移築に際しては露地との調和もはから

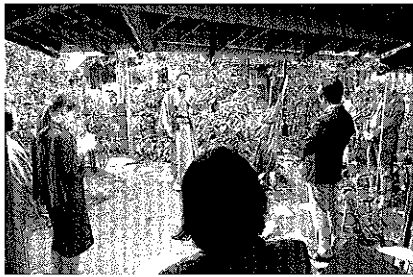
れ、茶座敷となるように配慮されました。

緞廬堂は十一畳半あり、南は露地に面し、一間の床が南東に付いています。床脇の吹き抜けの袖壁を挟んで北側が点前座で、四畳半切となっております。十一畳半の広間の中に六曲屏風を立てて四畳半の茶もできるように工夫されているのです。点前座の勝手側に障子窓があるのは、燕庵を始めとして藪内の茶室の特徴とのことでした。この障子窓から見えるのは、六畳の茶室、学市軒がしけんです。緞廬堂の床と点前座の東に位置します。障子を取り払われた窓を通して、学市軒奥の簾越しの薄明かりが緞廬堂に幽玄な雰囲気添えていました。

この日は、夏のしつらえにて、障子やよしずの類は全て外されておりましたので、露地の緑がまことに清々しく、簾が陽光のうつろいを感じさせます。古式ゆかしい茶家を訪問するにはふさわしい薄曇りの空にて、静かにお話を聴かせていただいていると白雲たなびく深山幽谷にいるかのような心地になりました。

劍仲と深い親交があったことで知られるのが、千利休（一五二二〜一五九一）と古田織部（一五四四〜一六一五）です。

劍仲は武野紹鴎から茶を学びましたが、利休は兄弟子にあたります。紹鴎の没後、天正



露地にて

成されているのを一望でき、大変心地よい瞬間でした。ここでしばらく、このあたりにまつわる説明を伺いました。この腰掛が、織部の創始による割腰掛の形式をもっており、雪隠もこれに併設されていること、ほかに貴人用の砂雪隠も設けられていること、袖摺り松のこと、利休から譲られた中門猿戸の戸摺り石と、ここでの貴人に対する作法のこと、中門奥の織部好みの延段のことなど、縷々詳しく説明してくださいました。見学者の方々も、貴人用腰掛での衣桁の使用法や、腰掛の屋根から差し出された腕木の役割など、熱心に質問されていました。

そして最後に、茶室「燕庵」の方に移っていきます。長石と自然石を組み合わせた織部

七年（一五七九）、利休の勧めもあり、大徳寺の春屋和尚に参禅するため、摂津尼崎から洛北に居を移します。また、劍仲は織部の妹を妻としますが、利休が媒酌人となりました。利休からは三年をかけて茶の作法をならい、天正九年（一五八一）に相伝の祝いとして贈られたのが茶室、雲脚うんきゃくです。茶道具一式と瓢形の板額「雲脚」も併せて贈られました。「雲脚」とは、粗末な茶という意味もあり、侘び茶になかった名とされます。

元和元年（一六一五）、織部は大坂夏の陣出征に際し、劍仲に自らの屋敷を譲りました。その中の茶室が、現在、藪内家を象徴する燕庵です。屋根の妻に掲げられた額「燕庵」は村田珠光筆で、珠光が醒ヶ井の傍らに結んだ草庵に掛けていたものだと言えられます。利休の所持となり、劍仲に託されました。燕庵の「燕」は、くつろぐ、という意味もあり、珠光がくつろぎの茶を実践していたのではなにか、ということでした。

このように、藪内代々のお家元、利休、織部など、一般には書物でしか出会えない方々の生きたお姿を彷彿とさせるお話を伺ったところで、これより、露地の見学、呈茶と続きます。

好みの延段を進み、「利休寄せ灯籠」や井筒、織部灯籠の鉢明かりをそなえた躊躇などを、間近かに見ながら燕庵に至ります。修理工事を終えて一新した茅葺のたたずまいを目の当たりにし、やはりこの屋根の存在感には、織部の好みが見み出ているように感じられました。しかもこの日は、鳥害から屋根を護るための網も外した状態で見ることができたので、見学者にとってはたいへん幸運なことでした。質問も次々と繰り出され、珠光と「燕庵」扁額のことや、織部の好みである花明窓や色紙窓のこと、織部灯籠や松明垣など露地まわりについてのことなど、質問は尽きるところがありません。次の見学班がしばらく待たねばならないほど、白熱した見学会となりました。

他ではなかなか見ることのできない、独自の構成がそここに見られ、また隅々まで手入れの行き届いた露地の中で、あつという間に時間



燕庵の前にて

露地の見学は、

緞廬堂から縁側をそのまま露地に降りて始まりました。緞廬堂は、もとは本願寺法如上人の居間であったと伝えられ、本願寺から当家へ移築された際、ゆかが低く改められたらしく、縁側と露地とのつながりは実に穏やかで自然です。御案内役に導かれながら飛石を伝い、まずは貴人門のあたりにとどまって説明を伺いました。貴人門は、寄付の機能をもつ「談古堂」や、茶室「雲脚」とひと続きで建っていますが、ここで説明を聞きながら、談古堂の舟底天井や軽妙な壁床のつくり、雲脚に懸かる板額や独特の床構えなどを、じっくり見学でき、みなさん興味深げに内部をのぞき込んでおられました。



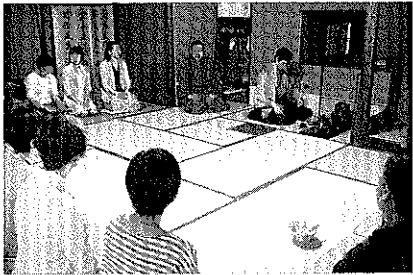
雲脚の前にて

が過ぎてしまふ、露地でのひと時を味わうことができました。

藪内家でのお呈茶は、十一畳半の緞廬堂で行われました。茶席は周囲の建具がすべて取り外され簾が掛けられており、緑に覆われた露地と茶席が一体となり、そこに心地よい風が縦横に通り、まさに市の中の山居。梅雨の季節とは思えないほど爽やかな茶の湯空間でした。涼やかな水牡丹のお菓子を取り、執事の石黒様のお道具の説明を拝聴させて頂き、藪内流のお点を拝見しながら、お茶を頂戴いたしました。お呈茶は、一班あたり会員約三十名が二つ



呈茶席 1



呈茶席 2

のグループに別れ、一つのグループが茶室・露地の見学、もう一つのグループはお呈茶席に別れて移動となり、時間で交代するという段取りで全三班行なわれました。茶室・露地のご説明と茶席は全部で六席設けて頂き、ゆつくりと藪内家の茶の湯を堪能させて頂きました。

末筆ではございますが、今回の藪内家の見学とお呈茶に関しまして、藪内紹由若宗匠様をはじめ、執事の石黒様、小林様ほか藪内家の方々には大変お世話になりました。心より御礼申し上げます。



「メンタルモデルの生成を促す茶道教授法
—点前の課題分割と下位課題の明示—」

高橋 尚美

茶道に限らず日本独特の「道」の学修にあたっては、いわゆる学校での学習とは違い、それは「修行」であるという認識が一般的であったと思われる。伝統的な徒弟制度の中で伝えられてきた「道」は、ただ受け身で師匠

の教えを請うだけのものではなかったゆえに、その教えも明示的ではなく非明示的な側面を持っており、それがまた却って大きな教育的効果をもたらすことに「道」ならではの奥深さがあると考えられる。

しかしながら今日において、そのような息の長い「修行」ではなく、即興的に理解できるようにする工夫が求められている現実がある。一番わかりやすい例は、外国から迎えた客人が日本文化理解の一環として茶道について知りたいと言われるような場合である。

筆者は、大学で茶道を中心とした日本文化に関する授業を十五年間担当しているが、学生は半年毎に入れ替わることになる。限られた時間数と条件の下での授業には茶道を三十分前年から教えている経験と元は高校の英語教師だった経験を融合させ、さまざまに授業の構成と展開を工夫しながら教授法を模索してきた。そこで、教育心理学での「認知過程」という分野からヒントを得て茶道の点前理解に応用してみたのが、メンタルモデル(※1)の生成を促す課題分割という考え方(※2)である。

ここでは、茶道裏千家の「盆略点前」を例に課題分割し、下位課題を分析する。まず、大きな手助けになると考える。筆者は、当初大学での留学生対象の授業で試み、その後日本人対象の授業でも試みた。すると、両者とも下位課題を明示して説明した後点前の構成を把握できるようになったことが、提出させた学生たちの記述から読み取れる結果となった。

性急な理解が必ずしも良いことであるとは思わないが、わからないままでは、わかりやすく課題分割して「メンタルモデルの生成を促すこと」も、今後「茶道教授法」の一つとして実践していく価値があると考えている。

※1 メンタルモデル
ここでは、人が心の中に構成する表象、内的モデルという意味で使っている。

※2 課題分割という考え方

鈴木宏昭・植田一博・堤江美子(一九九八)
「日常的な機器の操作の理解と学習における課題分割プラン」『認知科学』五、一四〇—二五

●参考文献

稲垣佳世子・鈴木宏昭・亀田達也 著
『認知過程研究—知識の獲得とその利用—』
財団法人放送大学教育振興会 発行

点前全体を「道具を清める」「茶を点てる」「道具を片付ける」という、三つの下位課題に分割する。

一つ目の「道具を清める」は、「棗を清める」「茶杓を清める」「茶筌を清める」という下位課題に分割される。「棗を清める」「茶杓を清める」ためにはそれぞれ「帛紗を拭く」という下位課題があり、「茶筌を清める」ためには「茶碗に湯を注ぐ」という下位課題があり、「茶碗を清める」ためには「茶巾を使う」という下位課題がある。と同時に、清める動作を通して自分自身の心を清め、精神を集中させていくことが「道具を清める」ことの本質である。

二つ目の「茶を点てる」は、「茶碗に抹茶を入れる」「茶碗に湯を注ぐ」「茶筌で攪拌する」という下位課題に分割される。「茶筌で攪拌する」ためには「ゆつくりかき混ぜる」「茶碗の底の方から上の方に攪拌する」「表面の泡を細かく整える」「の」の字を書くつもりで茶筌を茶碗から離す」という下位課題がある。と同時に、抹茶の量、湯の量や温度、攪拌する時間、茶の表面の真ん中が山になって盛り上がる見た目の美しさにも、心を砕くことが必要である。



平成二十六年第一回理事会が、四月六日(日)午後二時より同志社大学寒梅館六階大会議室に於いて行なわれた。理事二十一名、幹事五名の二十六名が出席し、以下の議題について会長の挨拶の後、田中副会長の司会進行で議題に沿って討議がなされた。

- 一、総会に提出する議案について
平成二十五年事業報告、決算報告
平成二十六年事業案、予算案
- 二、大会・見学について
- 三、会誌・会報について
- 四、その他

第一議題では、資料が配布され、確認が行なわれた。第三十七回研究会については、昨今の情勢を踏まえ次回の研究会で実施し、現地の茶関係の行事にタイミンを合わせて実施時期を切り上げると中村(修)理事から説明があり、四月中旬から参加者を募集することが承認された。

第二議題では、大会のシンポジウムのテーマが古田織部であることを踏まえ、見学会は藪内家の「燕庵」の見学をお願いしたところ

最後の「道具を片付ける」は、「茶碗をすすぐ」「客に片付ける旨を告げる」「茶筌をすすぐ」「茶巾を茶碗に入れる」「茶筌を茶碗に入れる」「茶杓を拭いて元の位置に戻す」「棗を元の位置に戻す」という下位課題に分割される。「客に片付ける旨を告げる」までには客と亭主が言葉のやり取りをする下位課題があり、客は亭主を思い、亭主は客を思う心の通い合いが顕著に現れる場面である。

茶道の点前というものは、反復練習を重ねてその構造のメンタルモデルを生成することができれば複雑に見えた動作の流れがわかるようになり、なぜそういう順序で点前が進むのかが理解できるようになるのである。つまり、従来の点前の指導法は主として「メンタルモデルを自発的に生成すること」を求める形をとってきた。それゆえ初心者には理解するまでに時間がかかり、殊更に難解な印象を与えてしまうことは否定できなかった。

そこで、課題分割の考え方を用いた下位課題を明示して指導する方法をとれば、初心者にありがちな間違いが減り、メンタルモデル生成に至るまでの時間も短縮できるものと考えられる。また、実際に自分で点前をするのではなく見るだけの場合も、その動作の意味理解の

許可をいただいたと中村(利)副会長より報告があった。今回は先方の要望もあり、会員限定で先着九十名の申込を受け付けることになった。

大会のシンポジウムについては、八尾幹事より説明が行なわれ、大会当日の役割分担などが話し合われた。

第三議題では、美濃部理事より発行が遅れている二十一号の状況報告及び、同日午前中に実施した編集会議の内容についての報告がされた。本年度から会誌が年二回発行されることを受け、二十二号については十月頃の発行を目標に作業を行ない、整えていくとの説明があった。

第四議題は、会誌オンライン公開の是非についての討議がおこなわれた。当面の間、全文公開は見送ることになったが、将来的には公開する方向で検討を続けることになった。

例会

東京例会

(平成二十六年四月十九日)

味兄弟になじみの「深川」、「道具屋(竹忠・本惣)」、「青井戸」、そして九日江戸藩邸での「お抱え力士による地取への招待」、「殿中で水野氏に御逢被成候ハッ」の記述が続く。

こうした内容からは、寛政十一年三月の回院院勸進相撲打ち切り後の「藩邸地取稽古」、また「水野氏」は寛政九年に西丸老中に返り咲いた水野忠友と推論される。発表ではさらなる考察を加え、この手紙は十六日の不白の会への不味参会を裏付けるものと結論づけた。不白の「門人家譜」には、不味の末弟で旗本蒔田撰津守定静の名がある。蒔田は不味門下でもあり、宗雅と親しかった。宗雅も不白と交流し七事式を行っている。不味自身に七事式の記録は無いが、不味を中心とする武家茶人達と不白の交流は、今後の研究の課題である。

東海例会

(平成二十四年六月二十三日)

「羽箒の変遷と茶人の好み―特に近代数寄者の名古屋の羽箒について―」

下坂 玉起

関東大震災後、しばらく名古屋に居た益田鈍翁などの近代数寄者は、森川如春庵などの名古屋の茶人と親しく交流した。名古屋の松

「井戸茶碗とその周辺」

吉良 文男

二〇〇一年から二〇〇二年にかけて実施された韓国慶尚南道鎮海市熊東面頭里熊川陶窯址の調査において六基の窯址が調査された。この発掘によっては、所謂「大井戸」のような高い高台をもつ豪快な作風のものは発見されていないが、胎土、釉薬、削り、梅華皮の存在など、伝世の井戸にきわめて近い特徴をもつ出土・採集遺物がみられた。

「井戸」という名前に関しては「人名由来説」「地名由来説」「形姿由来説」が主に唱えられてきたが、この熊川陶窯址付近には「Jeonsoo」(井谷)という地名があり、そこで作られた碗形品を、近くの齋浦に居住していた日本人たちは「Jeonsoo sabal(沙鉢)」と呼んだという説が発掘報告書(鎮海市、慶南発展研究院歴史文化センター「鎮海熊川陶窯址Ⅱ」二〇〇四年)に付記されていて、注目される。

同報告書での見解では、この窯址の稼働年代は一四五〇〜一五〇〇頃とされており、現在までの韓国における窯址発掘成果からみて、ほぼ妥当な推定だと考えられる。この年代は、一四二〇年の齋浦設置から一五四五年

尾流の指物師・長谷川甫斎(初代と二代)の羽箒が多数現存するのは彼らが求めたためだろう。近代数寄者は羽箒にも箱書し、甫斎は印も押したので、名古屋の羽箒には由緒や作者がわかるものが多い。お蔭で彼らの羽箒の好みや羽箒を通じた交流もわかってきた。

鈍翁は自庭で飼っていた鶴の羽で製した羽箒を如春庵に贈り、それを如春庵は名古屋の数寄者の茶会・第一回敬和会で使用した。如春庵の羽箒には尾張徳川家初代義直の文房具の変わった羽箒と瓜二つの羽箒があり、写しと思われる。甫斎は羽箒の柄を竹皮を擦った紐で結ったが、名古屋では今も真っ白い元結より竹皮の紐が好まれる。それは名古屋の数寄者の好みか。流派の様式にとられない独自の好みや茶会の興隆が多種多様な羽箒の需要を興し、甫斎もそれを助長した。

数内流など古式の三ツ羽は、三本の羽軸の断面を、形に重ねるが、名古屋の尾州久田流では上下逆の、形に重ねる。いずれも古様を伝えるが、形は尾州久田流派以外見当たらない。この他にも名古屋には他所にはない多様な結び方の羽箒が存在する。

近代数寄者の時代は、江戸時代の厳しい禁鳥制度と現代の鳥類保護制度の狭間で、日本

の齋浦廃絶までのなかに収まり、応仁の乱を契機に日本海に面した領主層が朝鮮へ通行した時期とも重なる。

伝世の井戸の多くは、遅くとも十六世紀初め頃までに日本にもたらされたものであると推定され、文献上、井戸の使用が伝えられるのは十六世紀第4四半期以後であるが、伝世はその半世紀以上前に始まる可能性が高いと思われる。

「一通の手紙から広がる不味と「江戸」の茶の湯」

谷村 玲子

本発表で解説した「三月七日付 松平不味から福知山藩主朽木昌綱(不見庵)宛」の手紙は、今回が初公開のものである。

不味と不白との交流に関しては、寛政十一年(一七九九)三月一日、品川東海寺の川上不白の会への不味三兄弟、そして昌綱の参会が知られる。この日の会記は、大正六年出版の「古今茶湯集」に収録されているが、実本の所在は不明である。以前から、会の存在そのものを疑問視する声もあった。

七日付の手紙に年号の記載は無い。ただ「一六日二八不白東海にて茶御座候、また茶客にハ御出不被成候事歎」とある。そして不

統治下の外地の鳥など、羽が自由に入手できた。近代数寄者が多数の羽箒を作れたのは、そんな時代だったからこそなのである。

例会のご案内

東京例会

七月十九日(土) 午後二時

(会場・東洋英和女学院)

「新出・鴻池伝来 名物裂コレクション」

佐藤 留実氏

「今泉雄作の日記と正木直彦の茶会記について」

依田 徹氏

九月十三日(土) 午後二時

(会場・日本大学芸術学部/予定)

「古伊賀水指銘破袋の変形プロセスについて」

関口 敦仁氏

「往来物の喫茶史料について」

高橋 忠彦氏

十一月二十二日(土) 午後二時

(会場・東洋英和女学院)

「五島美術館特別展「存星―漆芸の彩り―」によせて」

福島 修氏

「細川三斎と雪舟」

三宅 秀和氏

「未定」

寺田 孝重氏

「室町時代御成における喫茶文化について」

橋本 素子氏

東海例会

九月二十日(土) 午後二時

(会場:名古屋文化短期大学)

「茶湯と雪舟作品」

影山 純夫氏

十一月十五日(土) 午後二時

(会場:名古屋文化短期大学)

「未定」

八尾 嘉男氏

北陸例会

九月二十七日(土) 午後二時

(会場:生涯学習センター今立分館/予定)

「三田村氏庭園鳥瞰絵図・指図に見る茶の湯空間」

藤田 若菜氏

現地視察地 県指定名勝「三田村氏庭園」

(予定)

金沢例会

九月二十八日(日) 午前九時三十分

(会場:金沢市近江町交流センター 4F 会議室)

「桃山期の茶の湯の陶器」(仮)

大樋長左衛門氏

高知例会

七月六日(日) 午前十時~正午

(会場:高知県立文学館 慶雲庵茶室)

「茶の湯文化学会二十六年度大会の研究発表をテーマとしたシンポジウム」

永吉 溪滋氏

軽食茶事 正午~午後四時

席主 四名

会費 五百円

(会場:同志社大学/予定)

※参会希望者は予め連絡をして下さい

九月七日(日) 午前十時~正午

(会場:高知県立文学館 慶雲庵茶室)

文献研究「森勘左衛門日記」小松 聡氏



ご投稿いただいた論文が迅速に掲載されるよう、六月の総会において会誌「茶の湯文化学」の発行を年二回とすることが決議されました。

既に二十二号の作業は開始していますが、現在、平成二十七年三月発行予定の二十三号に掲載する論文を募集しています。投稿ご希望の方は、今年八月末までを目途に、学会事務局まで論文をお送り下さい。会誌原稿投稿規定については、会誌もしくは学会ホームページに掲載しています。(採用は審査を経た上で決定いたします)